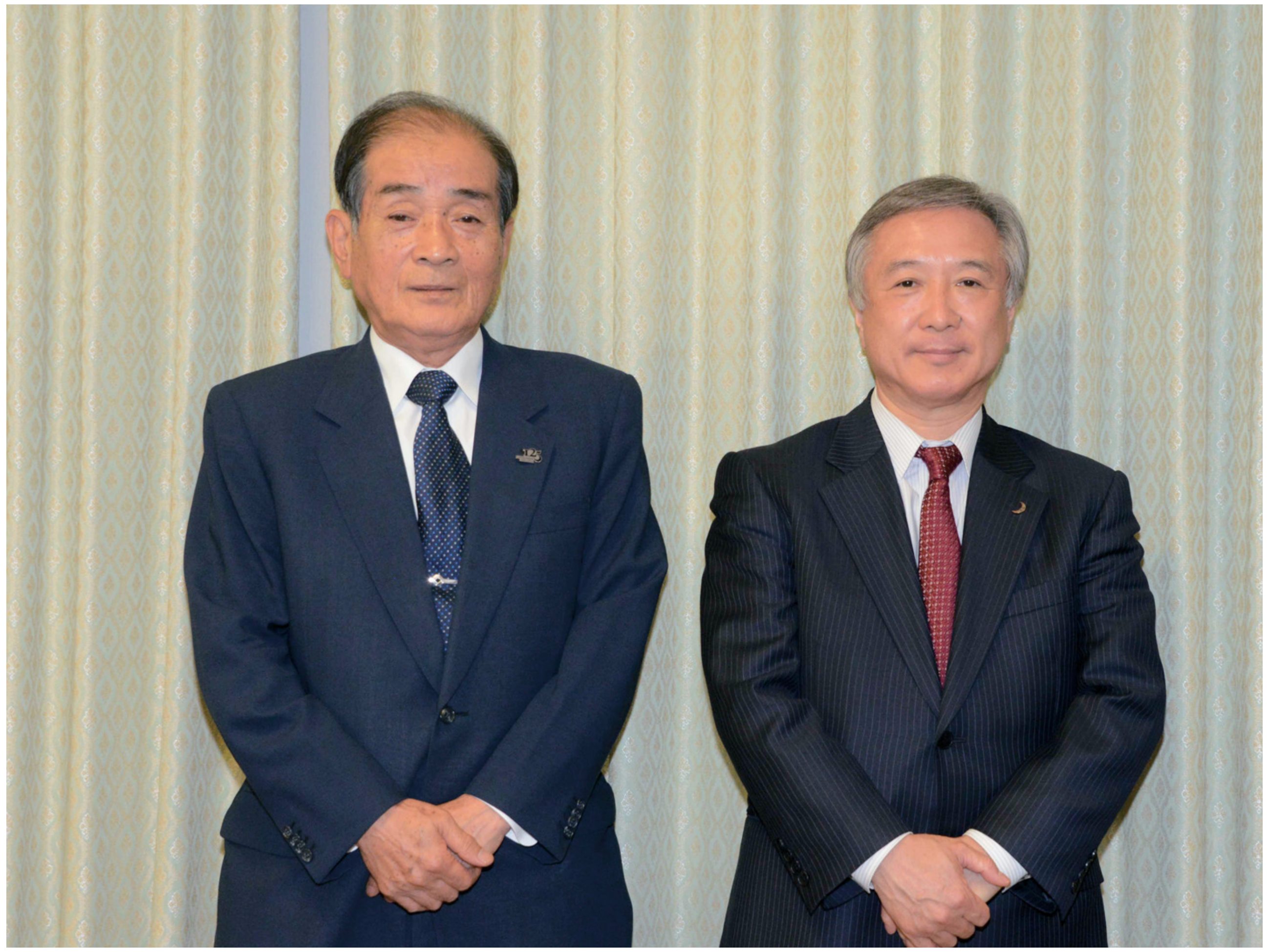
新学長に聞く！ 巻頭対談



大橋　太朗（関西学院同窓会会長）　　村田　治（関西学院大学学長）

スピード感を持って伝統の全人教育を推進し時代が求める人材を育成

大学進学率が50％を超え、大学教育が大きな転換を迫られている今、関学が目指す教育とは—。国が支援する「スーパーグローバル大学」への取り組みなど、世界市民を育てる全人教育について、小島幸保弁護士に進行役を務めていただき、今年４月から就任の村田治学長と同窓会の大橋太朗会長が大いに語りました。

スクールモットーや美しいキャンパス先生方の研究に引かれて入学

小島　学長は東京のご出身ですね。どのようなきっかけで関学に入学されたのですか。

村田　東京生まれですが、実は3歳から大阪で育ちました。それも〝河内〟ですので根っからの大阪人です。20年以上も前ですが、ある東京出身の学生が突然訪ねてきて「友達としゃべっている時、〝なんでそこでぼけへんねん〟と言われます。先生も東京出身とお聞きしました。どうすればいいでしょう」と相談されました。「悪いけど私は大阪人やから」と前置きしてから、一度吉本新喜劇を見に行くことを勧めました。「面白いと思えなかったら、今まで通りでいいんじゃないの」と言ったのを覚えています。

国立大学が第1志望でしたが、私学であれば関西学院大学に入学しようと思っていました。その理由は、まず奨学金制度が充実していること。それから、当時図書館に行くと、大学で勉強したいと思っていた経済学に関して、関西学院大学の先生の著作が圧倒的に多かったことです。先生方が、積極的に研究をされているのだと感じました。

スクールモットーにも惹かれました。私はアレクサンドル・デュマの「三銃士」に出てくる〝one for all, all for one〟という言葉が好きで、〝Mastery for Service〟には重なる部分があるなと思いました。言い換えれば「自分だけのために行動しない」ということです。さらに、受験の際に初めて訪れた上ケ原キャンパスの美しさも忘れられません。スクールモットーに惹かれ、美しいキャンパスに惹かれ、そして、先生方の研究に惹かれて、関西学院大学に入学しました。

大橋　当時も今も「経済学を勉強したい」と思って入学してくる学生は少ないでしょうね。先生方は積極的な学生が来たと喜んでおられたのではないでしょうか。大学では希望通り、経済学を勉強されて、充実した毎日だったのですね。

村田　そんな美談ではないですよ。国立大学に落ちて、しかも浪人した結果の入学でしたから、正直なところ、腐っていましたね。

大橋　浮上するきっかけは何だったのですか。

村田　恩師との出会いですね。森本好則先生のゼミに入ったことが大きかったです。森本先生はひと月に1回、自宅で勉強会を開いてくださって、とても刺激的でした。

大学院に進むことは自分で決めました。浪人しても国立に行けなかったので、学卒で就職したら、東大や京大、阪大出身の連中にコンプレックスを感じてしまい、自分が使い物にならないだろうと思ったのです。「リベンジをしよう」と大学院に入り、今があります。

村田　治（むらた　おさむ）

1980年　関西学院大学経済学部卒業
1985年　関西学院大学大学院経済学研究科博士課程後期課程単位取得退学
1996年　関西学院大学経済学部教授
　　　　その後教務部長、経済学部長、高等教育推進センター長を歴任
2014年　関西学院大学学長（現在に至る）

所属学会：日本経済学会、景気循環学会、生活経済学会、日本財政学会、高等教育学会
専攻：マクロ経済学、景気循環論

主な著書：1996年『公債と財政赤字のマクロ理論』有斐閣（博士学位論文）
　　　　　2012年『現代日本の景気循環』日本評論社

大学改革と国際化を断行し時代に合った大学教育を推進

小島　学長としての抱負をお聞かせください。

村田　文部科学省では、徹底した大学改革と国際化を断行し、世界的にトップレベルの教育研究を行う大学や、日本の国際化を牽引する大学を重点支援する「スーパーグローバル大学創成支援」を本年度から開始しています。本学はこの事業のタイプB（グローバル牽引型）に申請しており、「スーパーグローバル大学」に選定されれば10年間補助金を受けて、さまざまな事

大橋太朗（おおはし　たろう）
1962年　関西学院大学商学部卒業
1962年　京阪神急行電鉄株式会社（後の阪急電鉄）入社
1999年　阪急電鉄株式会社代表取締役社長
2003年　阪急電鉄株式会社代表取締役会長
2005年　阪急電鉄株式会社相談役
2008年　関西学院同窓会会長

業を力強く推進することができます。

申請のために、まず教育課程基本方針策定委員会を2月に発足させ、学部長が集まって会議を重ねました。文部科学省が求めるものが大学改革だからです。次期学長という立場で、審査のポイントについて、文部科学省に3回ほどヒアリングに行きました。それによると、改革の根本になるものは大学の意思決定のシステム、つまりガバナンスと教育の質の保証でした。ガバナンスがしっかりできていないと学生に高度な教育はできない、ということですね。

大橋　国が大学改革を求めているのは、どういう理由からですか。

村田　2009年に日本の大学進学率が50％を超えたことで、大学の役割そのものが変わってきているからでしょうね。マーティン・トローという高等教育の研究者によると、大学は、進学率が15％に達するまではエリート教育、15％から50％までならばマス型教育、50％を超えたらユニバーサル型教育になる。つまり、誰もが行く場所になり、大学教育の目的も変わると言っています。それまでは「知識や技能の伝達」だったものが、「新しく広い経験の提供」に変わってくると。今はまさにその過渡期であり、文部科学省が考える新しい大学の在り方に、われわれは対応していかなければなりません。

マーティン・トローはもう一つ、大学がユニバーサルな時代になれば、外部の経営者が入ってこなければいけないとも言っています。関西学院は数年前から、学校法人の理事に企業のトップだった方々が務めています。そういう意味では時代にうまく合っていると感じています。

大橋　ガバナンスについては、学長が法人の副理事長を務めていらっしゃいますから、大学と法人の一体化が一歩進んだのではないでしょうか。

村田　私学は大学と法人が分かれている所が多いのです。戦前からの私学のうち、この20年間に伸びている早稲田と立命館は、大学と法人のガバナンスが一致しています。全ての権限を集中させて、短期でものごとを決めることができる仕組みが出来上がっています。関西学院も学長が副理事長となり、理事長と意見を交わしながらやっていけるようになりました。

小島　大学と法人が一緒になることで、実行までのスピード感が全然違ってくるのですね。

大橋　法人の立場からすると、教育現場を担当している教員の意見を全て集約していくのは至難の技だと思います。ある程度は取捨選択が必要でしょうね。大学経営もスピード感を持って行わないといけません。教員にも経営という視点を眼中に置いてもらわないと、これからの大学は生き残れないと思います。

外部の評価も高い関学の学生キリスト教に基づく全人教育をさらに進化

小島　大学改革のもう一つの根本である教育の質の保証についてはいかがですか。

村田　関西学院大学を卒業した学生が優秀かどうかの客観的な基準が就職率です。関学は4千人以上の総合私学では7年連続全国第1位です。日経HRが実施した「企業の人事担当者が選ぶ大学総合ランキング」でも13位でした。このランキングは行動力、対人力、知力・学力、独創性、専門性・仕事力の五つの項目で集計・得点化されており、中でも行動力は関学が2位でした。ランキングが全てではありませんが、このように外部から高い評価を頂いたということは、これまでやってきた教育が間違ってはいなかった証拠だと思います。それをさらに進化させていきたいです。

小島　学生の質を保証する教育とは、どういうものなのでしょうか。

村田　本学の教育体制は、今回の「スーパーグローバル大学」の申請のためにつくったものではなく、関西学院が最初からやってきたことです。創立以来、キリスト教主義に基づく全人教育を掲げ、学生一人ひとりを大切にしてきました。少人数教育は当たり前で、ゼミ教育は充実していますし、今、注目のアクティブラーニングは、経済学部などいくつかの学部で実施しています。また、キャリア教育も早くからやっています。学生を大事にする伝統の上にあるわけですから、何も新しいことを始めることではないのです。むしろ「関学の時代が来た」と認識しています。アカデミックコモンズもできましたし、学際的な教育も一段と進化するでしょう。

小島　アカデミックコモンズは、どういうコンセプトでつくられたのですか。

村田　学生が仲間と一緒になって問題を発見し、その解決方法を議論し、見つけ、プレゼンテーションする機会の提供です。これは社会に出れば、必ず必要となってくることです。大学で得た知識など、すぐに役に立たなくなります。大学は、卒業後もずっと勉強し続ける能力、その基礎を養う場所です。問題意識を持って、課題について考え、それに対して結論を出す。これにはチームワークが必要なわけで、関学ではチームワークに強い学生が育っていると思います。

アントレプレナーや外資系企業で活躍できる人材の養成にも力を

小島　そんな雰囲気が、就職した後の評価にもつながっているのでしょうね。

村田　大橋会長や宮原理事長の世代に比べれば企業のトップになる人は多くはないですが、ようやく、今また増えつつあります。また、アントレプレナー（起業家）も誕生し始めており、学生なのに500万円ぐらい年収がある人もいます。今後はアントレプレナーの養成にも力を入れるべきだと感じています。また、外資系企業にもっと学生が入れるようにしていきたいと考えています。外資系企業で卒業生が活躍するということは、「関学はグローバルな人材を育てる」という明快なメッセージになりますからね。

進行　小島幸保（こじま　さちほ）
1995年　関西学院大学法学部政治学科卒業
1997年　司法試験合格
2000年　弁護士登録（大阪弁護士会）
2006年　小島法律事務所開設
契約関係、離婚・相続などの事例を扱う
NHK「バラエティー生活笑百科」顧問弁護士として出演中

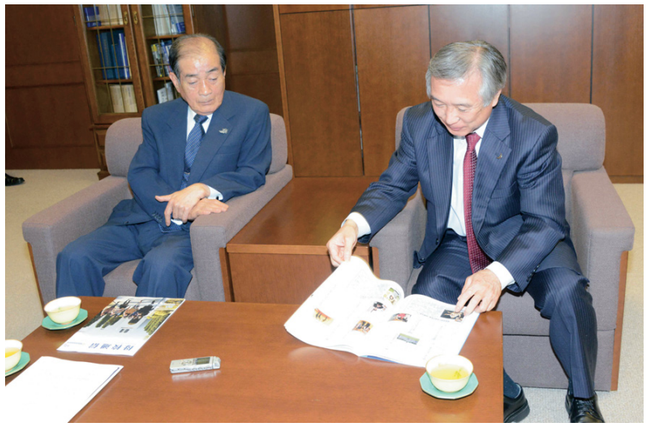
小島　大橋会長は海外で活躍されている同窓生と接点はおありですか。

大橋　年1回の全国支部長会には、国内の支部のみならず、海外25支部の代表の方も来られますので、その時にお会いしています。また、全ての支部を回るのは難しいのですが、各支部の

総会にもお邪魔しています。海外支部の方は視点が違っていて面白いですね。

小島　海外の会員数は増えているのですか。

大橋　もちろんです。最近海外支部が五つ増えました。同窓生はグローバルに活躍していますよ。



新基本構想の後半がスタート 見直しをしながら世界市民を育成

小島　2009年、10年後を見据えた新基本構想が策定され、本年度から後半5年間の計画がスタートしました。学長として特に力点を置かれている部分はありますか。

村田　一般企業では10年間の計画などあり得ないでしょうね。もちろん、目指すべき人間像「〝Mastery for Service〟を体現する世界市民」はぶれてはいけないのですが、5年たっていろいろな状況が変わってきているわけですから、もう一度、一から計画を見直す必要があると思います。「スーパーグローバル大学」の取り組みを含めて新しいやり方を考えていかなくてはいけません。時代がどんどん新しくなっているのに、大学だけ変わらないというのはおかしいでしょう。

大橋　企業の中長期計画だと5年から長くても7年ぐらいです。そして1年ごとに見直しをしています。新基本構想の具体的な中身を変えていくのかについては学長に期待したいところです。

村田　前期5年の成果はたくさんあります。予算の4割を国際化関係に充てたことで、その部分がかなり強化されました。グローバル人材育成推進事業とうまくマッチしましたし、その延長線上に今回の「スーパーグローバル大学」の取り組みもあります。高等部が、文部科学省が推進する「スーパーグローバルハイスクール」に指定されたのも一つの成果です。これらを踏まえた上でどう変えていくべきか、大学だけでなく法人も一緒になって全体で考えていく必要があると思います。

同窓会は大学の財産 若い層や女性の力も結集して 母校を支えていく

大橋　同窓会に関して、学長のご見解をお聞きしたいのですが。

村田　日本で同窓会が有力な大学が三つあります。一橋の如水会、慶應の三田会、そして関学同窓会。全て経済・経営・商学系の学部から始まった大学です。やはり、大学を卒業して経営者になったり、企業に入ったりすると横のつながりが重要になってくるのでしょうね。これは関学の財産、宝物です。

大橋会長には、同窓生の中でも若い層を集めることができる仕組みをつくっていただければと思っております。今回、大橋会長のアイデアにより、同窓会がUSJで125周年の記念式典を開かれ、女性と若者が多く来られたと伺いました。関学は校友課と同窓会事務局がうまく機能しているので、より強く連携していただくことで、何か新しい試みができるのではないでしょうか。

大橋　5月31日にUSJで開催した「関西学院創立125周年記念オール関西学院フェスティバル」は、お申し込み者の約7割が平成卒業の若い世代でした。これまで同窓会の行事に参加されたことがなかった方が多く来てくださいました。これからも音楽祭やスポーツイベントなどの周年記念行事がありますので、それをお知らせしながら、新たな層を同窓会のファンにしていければと思っています。

また、今の時代は卒業生の半数が女性で、この女性パワーを同窓会活動に生かしていきたいと考えています。支部によっては女性だけのスイーツの会なども開催していますし、各支部で工夫を凝らし、努力しているところです。

村田　関西学院の教育が素晴らしいものだとアピールできるのは同窓の方々の力です。各界で同窓生が活躍して初めて「関学ここにあり」と言えるわけです。本学の東京丸の内キャンパスでは同窓生向けにリカレント講座を開設しています。40歳代を対象とする「三日月塾」は日本を代表する企業のトップを務めた卒業生に登壇していただき、20歳代から30歳代を対象とした「新月塾」は三日月塾で学んだ卒業生がボランティアで講師を務めます。この講座で成長した卒業生がそれぞれの職場で活躍することが、関学のイメージアップにつながります。こうした活動を、より一層同窓生に向けて発信していきたいですね。

大橋　関学のステークホルダーは学生、生徒、保護者、教職員の皆さん、そして同窓会員だと思います。大学には、同窓会員をステークホルダーとして認識していただきたいというのが願いです。勢い余って大学に意見することもあるかと思いますが、皆さんの気持ちは「大学になんらかのかたちで寄与したい」ということなのです。

村田　教員の中には、外から意見されると「しんどい」と思うこともあるようですが、それは残念なことだと思います。その時代の社会で活躍されている同窓生の生の意見を聞くのは大事なことだと思います。

大橋　学生時代より卒業後の方が母校愛を感じるのです。社会経験を積んだからこそ、〝Mastery for Service〟の精神が強くなるのだと思いますね。

小島　最後に同窓生の皆さんにメッセージをお願いします。

村田　関西学院の誇りは同窓生の求心力です。それは〝Mastery for Service〟の精神があるからだと思います。これからはもっと大学に関心を向けていただけるよう、詳細な情報を発信していきたいと思います。大学と同窓のつながりを大切にしていきますので、今後ともご支援をよろしくお願いいたします。

大橋　私は募金推進委員でもあり、このたび125周年を機に多くのご協力をいただいたことに感謝いたします。ただ、今回の募金活動で、関学には寄付文化が十分に根付いていないと感じました。時間をかけて、寄付文化を醸成していかなければいけないと考えています。関学の発展は同窓生が物心両面から支えているということを誇りに思っていただきたい。同窓の皆さんには、寄付を愛校心の一つの表現方法と捉えていただければうれしく思います。